旺文社文庫

# しろばんば

井上　靖著

## 「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕　伊藤　整　茅　誠司　木村　毅
（五十音順）　塩田良平　中島健蔵　森戸辰男

旺文社文庫　しろばんば　270円

昭和44年1月15日　初版発行
昭和44年8月20日　重版発行

著者　井上靖（いのうえやすし）
発行者　鳥居正博
印刷所　旺文社専属　日新印刷株式会社

発行所　株式会社　旺文社
162　東京都新宿区横寺町
電話　東京（03）267-1111〔代〕

（中村印刷・三宅印刷・穴口製本）

407103

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします
書店または本社に直接お申し出ください

© 旺文社 1969
（許可なしに転載，複製することを禁じます）

旺 文 社 文 庫

# し ろ ば ん ば

井 上 　 靖 著

旺 文 社

# 目次


しろばんば
前編 五
後編 二八九
解説 小松伸六
作家以前の井上靖 五〇五
作品解説 五一三
作品鑑賞 五一七
草の匂いとユーモア 福田宏年 五二四
井上靖氏とふるさと 巖谷大四 五二八
代表作品解題 五三二
参考文献 五三六
年譜 五三七


挿絵 生沢朗

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

# 前編

## 一　章

そのころ、と言っても大正四五年のことで、いまから四十数年前のことだが、夕方になると、決まって村の子供たちは口々にしろばんば、しろばんばと叫びながら、家の前の街道をあっちに走ったり、こっちに走ったりしながら、夕闇（ゆうやみ）のたてこめ始めた空間を綿屑（わたくず）でも舞っているように浮游（ふゆう）している白い小さい生きものを追いかけて遊んだ。素手（すで）でそれをつかみ取ろうとして飛び上がったり、ひばの小枝を折ったものを手にして、その葉にしろばんばを引っかけようとして、その小枝を空中に振り回したりした。しろばんばというのは〝白い老婆〟ということなのであろう。子供たちはそれがどこからやって来るか知らなかったが、夕方になると、それがどこからともなく現われて来ることを、さして不審にも思っていなかった。夕方が来るからしろばんばが出て来るのか、しろばんばが現われて来るので夕方になるのか、そうしたことははっきりとしていなかった。しろばんばは、真っ白というより、ごくかすかだが青味を帯（お）んでいた。そして明るいうちは、ただ白く見えたが、夕闇が深くなるにつれて、それは青味を帯んで来るように思えた。

しろばんばが青味を帯んで来るころになると、帰宅を促（うなが）すために子供たちの名を呼ぶそれ

ぞれの家の者の声が遠くから聞こえて来た。「ゆき、ごはんだよ」とか「しげ、めしだよ」とか、「早く来んとめし食わせんぞ」とか、そんな声が、遠くから聞こえた。すると、幸夫がいなくなり、次に茂がいなくなるといった具合に、子供たちはひとり減りふたり減りして行った。

子供たちはお互いになんの挨拶もしなかった。しろばんばの浮游している夕闇の中を、けんけんしながら家のほうへ走って行く者もあれば、ひばの枝を右手に高く翳して、家のほうへ勢いよく駆けて去って行く者もあった。それぞれ各自の家に呪文でもかけられたように吸い寄せられて行った。

洪作はいつもいちばんおそくまで遊んでいた。洪作のところは夕食がおそく、洪作の遊んでいるところへ夕食を知らせにおぬい婆さんがやって来るようなことはめったになかった。だから、洪作は毎日仲間がひとり残らずいなくなってしまうまで街道で遊んでいるのが常だった。そして友だちのたれもがいなくなり、夕闇があたりをすっかり閉じこめてしまってから、自分の家のほうへ歩いて行った。

洪作は自分がおぬい婆さんといっしょに住んでいる土蔵に帰り着くまでに、街道に沿った家々の幾つかの明るい夕食の灯を目にした。子供たちの遊び場は、部落の者たちがお役所とか御料局とか呼んでいる帝室林野管理局天城(1)出張所の正門前に決まっていた。そこから土蔵までの間に、道に沿った家はほんの数えるほどしかなかった。お役所の前に洪作の家の本家にあたる〃上の家〃という屋号の家があった。ここには洪作の祖父と祖母と、そして洪作の母の弟姉たち、つまり洪作にとっては叔父叔母にあたる男の子や女の子がいた。いちばん末のみつは洪作と同年であった。

洪作は本家の明るい灯を見、そこに自分の母方の祖父母がいることを知っていても、そこをのぞ

（1）静岡県の東部、伊豆半島のほぼ中央にある山々。『伊豆の踊子』で有名な天城峠がある。

# 一　章

くことはしなかった。昼間はみつのところへ遊びに行ったり、用事がなくても何回も自分の家と同様に上がり込んだりしていたが、夕食のときは、そこの灯に妙に疎遠なものを感じた。ここはお前の家とは違うのだぞ、お前の家は土蔵なのだぞというようなものを、一家の者たちがにぎやかに談笑しているそこの雰囲気に感じた。

ときに、何かの用事で、洪作は本家に上がって、みなが夕食を食べている席に顔を出すことがあったが、そうしたとき、祖母のたねは、

「洪ちゃ、ここで食べて行きな」

と、必ず声をかけてくれた。

「ううん、うちへ行って食べる」

「ここも、お前の家だがな。そう嫌わんで食べて行っておくれ」

「ううん、おら、いやだ」

洪作は祖母たねがなんと言っても、執拗にその招きには応じなかった。祖父やそのほかの者たちは、そうしたときたいてい洪作のことなどには気を奪られず勝手に箸を動かしていた。洪作はそうした本家の食事どきの雰囲気には反発せざるをえないものを感じた。食事どきでないときは、自分の家と同様にふるまっていたが、食事どきだけはれっきとした他人の家になった。自分の家でもないのに、御飯など御馳走になるものかといったところが、洪作の気持ちの中にはあった。

この本家の隣に小さい路地をはさんで雑貨屋があった。小さい店に金物類を初めとしていろいろな雑貨が土間からはみ出すほどぎっしり詰まっていた。村ではただ一軒の雑貨屋であり、金物屋であったので、針金とか釘とか鍋とか庖丁とか、そういった物を買うときは、村人はみなこの店へ来

た。

そしてその隣は〃さどや〃という屋号の農家で、母屋のほかに牛小屋があって二頭の牛がいつも暗い中に鼻をうごめかしていた。そのさどやの前に、日傭仕事をしている文吉という独身の四十男の住んでいる小さい家があった。この文吉の家の隣が、部落ではいちばん庭らしい庭を持った洪作の家の屋敷になっているが、今は母屋のほうは東京から来て村医をしている医者に貸し、屋敷の裏手の土蔵のほうに、洪作とおぬい婆さんのふたりは住んでいた。母屋の医者は夫婦者で子供がなかったので、家の中はいつもしんとしていた。医者ではあったが、患者はほとんどなかった。死にそうな病気にでもならぬ限り、部落の者はたれも医者などには診てもらわなかった。

洪作はそうした部落の旧道に沿った四五軒の家々からもれて来る明かりを横目に見ながら、自分の家の屋敷にはいり、母屋の脇を通って裏手の一段高くなったところに建てられてある土蔵へと戻って行く。洪作が戻るころ、おぬい婆さんはたいてい、夏でも冬でも、土蔵の階下からもれているランプの光をたよりに、戸外で炊事をしていた。炊事といっても、老婆ひとり子供ひとりの生活なのでしごく簡単なはずだったが、どういうものか、夕食の支度はいつもおそくなった。

「ただいま」

洪作は言った。〃ただいま〃というような言葉は洪作以外村の子供たちはひとりも使わなかった。しかし、洪作はおぬい婆さんから、戸外から帰って来たら必ずそういう言葉を口から出すように言い含められ、それに慣らされて来ていた。

洪作はおぬい婆さんとふたりきりで、毎晩ランプの下でおそい夕食の膳に向かった。

「坊」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

おぬい婆さんは洪作のことをこう呼んだ。

「上の家のほうへ今日は何度行ったかい」

「二度だ」

「あんまり行かんほうがええ」

おぬい婆さんは言った。夕食のとき、必ずふたりの間にかわされる会話であった。洪作はそれに対していつもいいかげんな返事をした。行かないことを約束するわけには行かなかったからである。上の家の付近が、洪作ら少年たちの遊び場の中心地で、一日に何度も水も飲みに行かなければならなかったし、珍しいものでも作っていればそれも食べに行かねばならなかった。

「上の家へ行くと、あんまりええことはないぞ。大五の餓鬼はほんとに小憎らしい。道で会っても知らん顔してけつかる。みつはみつで、前はほんに気前のええ子だったが、いまはみんなを見習うて、いつ会ってもふくれっ面をしよる。おおかた、大人たちが悪いことを吹き込んでいるずらよ」

おぬい婆さんの言うことは決まっていた。洪作は三百六十五日、毎晩のように本家である上の家の悪口を耳にしなければならなかった。おぬい婆さんは本家の子供たちの悪口を言ったが、ほんとうはその親である洪作の祖父母たちをやっつけたくてたまらないらしかった。しかし、さすがに祖父母の名は口には出さなかった。そうしたおぬい婆さんの心の内部は、子供の洪作にも手に取るようによく理解できた。

「上の家のおじいさんは嫌いだ」

ときに洪作が祖父のことをこう言おうものなら、おぬい婆さんは目を細めて、洪作の頭を撫でんばかりの恰好で膝をすり寄せて来た。

「洪ちゃのほんとうのおじいさんだぞ。目に余ることがあろうと、どんなこと言われようと、悪口を言うでないぞ。いいかい。上の家の衆は料簡は狭いがみんな根はいい人たちなんじゃ」

そんなことを言った。それは洪作に言うというより、自分自身に言って聞かせる言葉を声に出して言っているに違いなかった。

洪作はうれしそうなおぬい婆さんの顔を見たいために、ときどき本家の上の家の悪口を言った。悪口を言う気になれば、実際悪口になる材料はいくらでもあった。洪作は同い年のみつと毎日のようにいっしょに遊んでいたが、上の家の祖父母ははっきりと自分の孫より自分の娘のほうをかわいがっていることを示したし、犬猿ただならぬおぬい婆さんに引き取られていっしょに住んでいるというだけで、洪作を自分たちの仇敵の片割れのように見る場合もあった。

また上の家には、洪作には曽祖母にあたるおしな婆さんも住んでいたが、この曽祖母までが洪作をとかく色目で見がちであった。おしな婆さんは祖父の養母にあたり、家の者たちと血のつながりはなかったが、みなからは大切にされていた。高齢のためいるかいないかわからぬように奥の一室に閉じこもったままひっそりと生きていたが、いつかたまたま洪作と顔を合わせたとき、

「かわいそうに、ろくでもないもんの人質になって、この子はだんだん変な子になりよる」

と言ったことがあった。そのとき洪作は皺だらけの顔の中で口がもごもご動くのを見つめていたが、やがて、

「おばあちゃん、いい年して死なんのか。いつ死ぬんだ？」

と言った。実際に洪作には、背を折れそうに曲げて、たるんだ皮膚に深い皺が刻まれている八十歳を越えた老婆が、いつまでも生きて口をきいているということが不思議に思われた。

おしな婆さんは洪作の言葉に呆れ果てたというように目をしろくろさせて二の句が継げないという恰好だった。洪作は、おぬい婆さんを悪もんと言い、自分を変な子になったと言ったおしな婆さんに一矢報いてやり、一日中置物のように一個所にすわったまま動かないでいる老婆のもとから離れた。

おぬい婆さんは曽祖父辰之助の妾であった。辰之助は地方では名医で通った医者で、第一回の三島(1)の県立病院長をしたくらいだったから、もし彼が野心的な人間であったら、晩年を郷里の伊豆などへ引っ込まなくてすんだはずであった。それをどういうものか、いちばん働きざかりの四十代半ばに、すべての公職を棄てて伊豆の山奥へ引っ込んで、田舎医者として余生を送ったのである。辰之助は田舎で開業医として忙しく暮らした。駕籠で、半島の基部の三島や、またその反対の半島の突端部の下田(2)まで、往診に出かけるような繁盛ぶりを示した。

おぬい婆さんは、その辰之助が下田の花柳界(3)から落籍(4)して連れて来た女性で、それでなくてさえうるさい土地では、かなりいろいろ取沙汰された人物であった。おぬい婆さんは辰之助が五十五歳で他界するまで陰になり日向になりして辰之助のめんどうを見、その死後も村にいついてしまったしっかり者だから、村人全部から白い目で見られるだけのことはあったようである。

辰之助は中年以後、正妻のしなとはずっと別居していた。しなは沼津(5)の山本という家老の娘で、

（1）静岡県東部、伊豆半島の基部にある市。（2）江戸時代より港町としてさかえ、鎖国時代、外国船の来航を認めた数少ない港の一つ。下田条約締結の地。（3）芸者・遊女の社会。（4）金を出して、芸者などをやめさせること。（5）静岡県東部の中心をなす市。旧城下町。

嫁に来てから一度も台所に出たことがないといった女性であった。よく言えば世間知らずのおっとりした女であり、悪く言えば、何もできない女であった。婚礼のとき朱塗りの風呂桶と二本の薙刀を持って来て、そのことが長く村人の語り草となっていた。

辰之助は本妻のしなとの間にも、妾のぬいとの間にも子供がなかったので、自分の兄の子供である文太を養子として迎え、それまでの家、つまり上の家を文太に譲って、自分は近くに家を一軒構えて、そこで開業して妾のぬいと住んでいた。晩年辰之助は文太の長女を分家させ、医者を開業していた家を与えることにし、その養母としてぬいを分家の籍に入れた。辰之助は妾のぬいの晩年をそのようにして酬いてやったのであった。戸籍上祖父の妾を養母とするようになった文太の長女は、洪作の母、七重である。

洪作の父は軍医で、そのころ母七重とともに任地の豊橋(1)に住んでいた。どうして洪作が両親のもとを離れて曽祖父の妾ぬいのもとに預けられるようになったか、当時の洪作にはもちろん理解の行かないことであったが、それはおしな婆さんの「悪いもんの人質になって」という言葉が、ある程度真相をうがった言い方であった。おぬい婆さんは、洪作の家における自分の不安定きわまる地位をもっとしっかりしたものにするために、洪作の両親から洪作を人質として取り上げるといった気持ちもないではなかったに違いなかった。

最初、洪作の母親が洪作の妹小夜子を妊ったとき、人手が足りない理由でごく一時的に洪作はおぬい婆さんに預けられたのであった。おぬい婆さんは自分の懐ろに転がり込んだ願ってもない宝物を、一度手に入れた以上終生決して離すまいと決心したのに違いなかった。おぬい婆さんがそうし

(1) 愛知県東南部の市。製糸業の中心地。

た考えのところへ、洪作自身が、おぬい婆さんのもとで五歳から六歳へかけての一年を過ごすうちに、両親よりおぬい婆さんのほうになついてしまって、家へ帰りたがらなくなってしまったことも大きな原因であった。

こういうわけで、洪作は五歳からずっと郷里の伊豆半島の天城山麓の山村で、おぬい婆さんというまったく血縁関係にはない女性と起居をともにすることになったのであった。したがって、おぬい婆さんと本家の上の家とは、まったく仇敵の関係にあった。曽祖母のおしな婆さんにしてみれば、おぬい婆さんは自分から夫を奪った不倶戴天(1)の仇敵であったし、祖父母たちから言わせれば、曽祖父辰之助に取り入ってついに本家よりも大きい家屋敷を手に入れ、しかも自分たちの娘を養女としてその義母になりすまし、いまは孫の洪作まで人質に取り上げてしまっている腹黒い女であったのである。

上の家は人の出入りの多い家だった。平生は洪作の祖父母のほかに、洪作と同年のみつ、みつより三つ年長の大五、それに曽祖母のおしな婆さんの五人暮らしであったが、このほかにふたりの人物が絶えず出入りした。それは東京の中学校へ行っている大三と沼津の女学校へ行っているさき子であった。大三とさき子は休暇ごとに家に帰るのはもちろんだが、それ以外でも日曜と休日が続いたりすると、必ず家へ帰って来た。ふたりとも、洪作にとっては叔父と、叔母にあたるわけであったが、みつが大三のことは兄さん、さき子のことは姉ちゃんと呼んでいたので、洪作もまたそれにならって同じ呼び方をした。

(1)　恨みをはらさずにはおけないほど憎むこと。

だから、正月とか、春休みとか、夏休暇のときは、上の家は大人数だった。食事のときなどは子供の洪作の目にもひどくにぎやかに見えた。朝から晩まで奥の一間に閉じこもっているおしな婆さんも、食事のときだけは体を二つに折って、畳をなめるようにして食卓のある居間へ出て来たので、八畳の部屋はいっぱいになった。曽祖母おしな、祖父、祖母、大三、さき子、大五、みつと家族だけでも七人、それにたいてい使用人がひとりかふたりいた。

祖父文太と祖母たねは子だくさんで、このほかにまだ四人の子供を持っていた。長女は洪作の母である七重であり、その下がアメリカへ渡っている大一、満洲へ行っている大二、それから同じ半島の西海岸の大きい農家松村家へ嫁いでいるすず江である。しかし、洪作は大一にも、大二にも、またすず江にも会ったことがなかった。ただ名前だけは、いずれもみつの呼び方にならって、大一兄さん、大二兄さん、すず江姉さんと呼んでいたが、どのような風貌を持っている人物かはまったく知らなかった。

祖母のたねが、ときどき、洪作がみつと同じような呼び方をするのを聞きとがめ、

「坊は、大一叔父さん、大二叔父さん、すず江叔母さんと呼ばんといかん。兄さんや姉さんじゃない。叔父さんと叔母さんじゃ」

と訂正した。しかし、洪作はそれに応じなかった。もしそうするなら、大三兄さんも大三叔父さんでなければならなかったし、さき子姉ちゃんもさき子叔母ちゃんと呼ばなければならなかった。そんなことは考えてみただけでおかしくて口から出せないことだった。さき子姉ちゃんを叔母ちゃんなんて言えるかと洪作は思った。

しかし、洪作はあるときふといたずら心から、さき子を叔母ちゃんと呼んでみたことがあった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com